

転作助成と水田農業との関係についての研究プログラムの紹介
—水田利用と農地移動に注目して—

2024年2月14日(水)

西川邦夫(茨城大学)

@農業再生協議会に関する研究会

1. 研究プロジェクトの概要

◎二毛作科研

- ・「水田高度利用の構造と課題—二毛作と単収水準に焦点を当てて—」(科研費・基盤研究(B)、2020～2023年度)
- ・メンバー：西川(研究代表者)、安藤光義(東京大学)、平林光幸(農林水産政策研究所)、渡部岳陽(九州大学)

◎水田科研

- ・「転作交付金と地代負担力—水田利用と農地市場への影響の解明—」(科研費・基盤研究(B)、2023～2027年度)
- ・メンバー：西川、安藤、渡部、東山寛(北海道大学)、野中章久(三重大学)、桑原考史(日本獣生命科学大学)

2. 研究プロジェクトの経緯

- ・二毛作科研では「水田の利用」を対象に。水田フル活用政策下で北関東・南九州において二毛作割合が上昇していることに注目。水稲(表作)の品種転換と裏作拡大の関係を明らかにすることを目的に。
- ・水田科研では上記に加えて、「水田の移動」にも注目。農地移動の形態(賃貸借/売買)、価格(地代/地価)に与える影響を明らかにすることを目的に。
- ・いずれの科研も、①フィールドワークにもとづくこと、②転作助成が水田の受け手・出し手の行動に影響すること、に注目していることは共通。

3. これまでの代表的な研究成果

- ・加工用米(晩生品種)の作付増加により、裏作のイタリアンライグラス等の作付拡大も可能に。水田利用率の上昇とMA米(焼酎原料米)の置き換えが進展(宮崎県の事例、西川(2021))。
- ・飼料用米(晩生品種)の作付増加により、裏作の麦の作付拡大が可能に。また大豆一毛作が解消して水田利用率が上昇(栃木県の事例、西川(2022))。
- ・水田科研はまだめばしい研究成果は無し。

4. 今後の予定

- ・フィールドワークを中心に事例とデータの収集を続けていく。

参考文献

- ・西川邦夫(2021)「南九州における水田二毛作経営の存立条件—宮崎県都城市A経営の事例より—」『農業経営研究』59(2):37-42.
- ・西川邦夫(2022)「栃木県における水田二毛作の再編と担い手—新規需要米の導入による表作への影響に注目して—」『農業経営研究』60(2):65-70.